

袖ヶ浦市 <sup>ふみわき</sup> 文脇遺跡

袖ヶ浦市文脇遺跡で大量の渡来銭が出土し、全体を土ごと切り取って屋内に移動させたことは、平成22年10月の速報でお知らせしたとおりです。その後、記録しながら銭を取り上げる作業を進め、大よその枚数や緡銭(さしぜに)の状態などがわかってきました。

銭は太さ3mm~4mmの藁紐(わらひも)で97枚前後を一緡(ひとさし)として結び瘤で区切り、それを複数連ねていました。一緡が100枚単位ではないのは、一緡=100文=97枚とする「省百法」(しょうびやくほう)という取り決めで流通していたからです。



一緡を区切る藁紐の結び目



藁紐の端とみられる部分



銭の取り上げ開始



ほとんど取り上げた状態

大量の渡来銭は、地面に掘った直径約 65cm の丸い穴の中に直径約 40cm、深さ約 20cm の曲げ物とよばれる木製容器をおき、その中に納められて木製の蓋がされていました。

銭の総数は、現地説明会や10月の速報では約 7,000 枚とお知らせしましたが、全部取り上げたところ約 29,000 枚にのぼることがわかりました。これを 97 枚で割ると、約 300 緡 (=30 貫文) 納められていたこととなります。

現在、取り上げた銭種の読み取り作業を進めているところで、これまでに約 2,500 枚の読み取りが終わりました。その結果、銭は約 50 種類あること、中国の北宋と南宋の銭がほとんどで特に南宋の銭が圧倒的に多いこと、前漢の四銖半両(初鑄 紀元前 175 年)や後漢の五銖(初鑄 24 年)など珍しい銭が含まれていることなどがわかってきました。



一番新しく造られた銭(最新銭)は至大通寶(初鑄 1310 年)という元の銭です。

至大通寶を最新銭とする全国の事例と銭種の構成がよく似ていることもわかってきており、これまでの研究成果によれば銭が埋められたのは 14 世紀後半と推定されます。